

日高山脈における登山の特徴と課題、今後の取組

北海道大学大学院農学研究院・教授 愛甲哲也

はるかな山。そう呼ばれる山は少なくはないが、そう呼ばれるのにふさわしいのが日高の山々だろう。主稜線に挑戦するには、登山口に辿り着くまでの林道、その後の林道歩きなどアプローチは長い。前半には沢の遡行があり、尾根にとりつき後も歩きやすい登山道があるわけではない。登山者にも相応の覚悟と準備を要求する。周辺には山並みを眺望し、特異な高山植物群落を楽しめる比較的アプローチと整備状況もよい山もある。古道を復活させたフットパスもある。初心者向けから上級者向けまでバリエーションに富んだ登山体験が魅力だが、課題も少なくない。2024年11月に行われた北海道高山植物保護ネット市民フォーラムで講演された小野有五先生は、日高山脈の特徴を「アプローチが限られているので、人間をコントロールしやすい」「日本で初めて真の Back country がある国立公園ができる」「原生的な自然を広域的・連続的に保護できる」「日本のすべての国立公園のなかで、河川の重要性が最も高い」「十勝平野と一体であるため、十勝の重要性が決定的に増大する」という意義をあげられている。その一方で、課題として「それぞれの入口で、きちんと整備ができるか?」「Back country をきちんと残せるか?」「広域にわたる管理・保護体制が確立できるか」「川の自然・本来の生態系を維持または復元できるか?先住民との関わりは?」「十勝は、これを機に、日高山脈を『最大の財産』とする意識改革ができるか?日高側のアプローチをどのように改善できるか?」といった課題をあげられている。

日高山脈の登山道の特徴

日高の山に岳人の足が向かったのは、大雪山などの中央高地よりやや遅く、大正末期からであった。北海道大学山岳部を中心に登頂ルートの開拓がすすみ、北海道内外の大学が登頂を競い合った。北大山岳部が厳冬期の幌尻岳に、慶應義塾大学山岳部が夏のペテガリ岳に到達した。北大山岳部は、1943年に厳冬期のペテガリ岳登頂を果たしたが、その前に雪崩で8名の命を失っていた。北海道内外の大学山岳部が日高の主稜線に挑んだが、その代償も少なくなかった。1965年には北大山岳部の6名がカムイエクウチカウシ山を目指しながら雪崩にあい、5年後には室蘭工業大学山岳部員が2年連続で札内川の沢で命を落としている。

その後、森林の伐採のためや水力発電のために林道が延伸し、登山口へのアプローチは改善された。しかし、一般向けのコースでも沢登りがあり、わずかな手がかりを辿るルートファインディングも必要となる。国立公園の公園計画には18の歩道が予定されており、様似山道、猿留山道、北海道自然歩道は探勝歩道であり、アポイ岳、豊似岳が初級向けとなっている（登山コース評価は、北海道夏山ガイドを参照）。主稜線にある幌尻岳、ペテガリ岳、カムイエクウチカウシ山などは、100点満点で90点以上の上級コースである。それらのコ

ースは、尾根へのとりつきに沢登りが必要となる。日本百名山で最も難しいと言われる幌尻岳は、シャトルバス終点のゲートから林道を7.5km歩き、そこから幌尻山荘まで20回ほどの徒渉をしながら沢を遡行する。川の増水で停滞を余儀なくされることや、流される事故も発生している。幌尻岳に到達するには新冠ポロシリ山岳会により登山道と避難小屋の管理が行われているコースもあるが、前半に19kmの林道歩きがあり、頂上までは急登の連続で、「十分な力量と覚悟を持った人だけに許される山」(ポロシリ・コード)である。

公園計画書には「一般的なコースとして利用されている登山ルートなどの歩道、野営場、園地、避難小屋等を必要最小限計画する」と方針が示されている。夏道の登山道だけではなく、沢登り、積雪期などのいわゆるバリエーションルートも多く、もちろんそれらは国立公園の公園計画上は歩道とはならない。主稜線の縦走路を辿るには夏は藪漕ぎ、冬期は本格的な雪山登山であり、幌尻岳周辺を除き、公園計画には掲載されない。避難小屋やトイレについては、多くは登山口や主稜線のとりつき地点に設置されている。公園計画には、幌尻山荘など6つが記載されているに過ぎない。他にもいくつかの避難小屋があり、多くは地元自治体や山岳会により管理されている。国立公園化に向けての「山のトイレを考える会」の調査によると、14の避難小屋と15のトイレがあり、山岳会等の尽力でそれらが維持されており、一部ではその継続的な管理が課題となっている。

原生的な登山体験を維持し、国立公園を管理する挑戦

国立公園として登山道の管理や整備を考える際には、日高山脈のもつ原始的な登山体験を維持し、過剰整備を避ける管理水準を関係者で共有する必要がある。以前に、保全活動に取り組んできた日高山脈ファンクラブのメンバーで、幌尻岳の登山道の管理水準を、大雪山グレードを参考に議論したことがある。幌尻岳の場合は水準を6段階に増やし、上級登山者の利用を想定し、案内標識、注意標識、トイレも整備せず、自己責任での利用を前提とする原生区域のゾーンを設けるのが適当だと検討した。これから国立公園の管理運営計画を地域の関係者と議論しながら策定していく際に、必要な視点となるだろう。

ROSマトリックス 日高山脈における各ゾーンごとの整備の基本方針と幌尻岳登山道理想像区分案								
ゾーン	ゾーン1	ゾーン2	ゾーン3	ゾーン4	ゾーン5	ゾーン6		
整備の水準による区分	整備区域	準整備区域	自然区域	準保全区域	保全区域	原生区域		
想定される主な利用者	日帰り観光客	ハイカー・自然愛好者の初心者	自然愛好者	初級の登山者	中級の登山者	上級の登山者		
施設整備水準	歩道	舗装	砂利、石敷き、締まった土	土・歩行に支障がない	根・石・ぬかるみ等で気をつけて歩く必要有	岩地、ガレ地、などらかな沢含む	沢、岩壁	
		革靴・ハイヒール可能	スニーカー・ウォーキングシューズが適	軽登山靴適、スニーカー可	軽登山靴・登山靴適	登山靴 沢靴適	沢靴適	
		手すり・階段完備	危険な箇所到手すり・階段	施設なし	両側から草木かかる	藪こぎ 渡渉	渡渉 避行	
	橋	永久橋	固定橋	移設可能橋	丸太、板	なし	なし	
		案内標識	各入口の設置	主要入口の設置	主要入口の設置	主要入口の設置	設置しない	
	標識	道しるべ	分岐点・一定距離ごとに設置	分岐点・一定距離ごとに設置	分岐点に設置	分岐点に設置	主要分岐点に設置	設置しない
		解説標識	優れた景観や特徴な動植物生息地に設置	優れた景観や特徴な動植物生息地に設置	優れた景観や特徴な動植物生息地に設置	設置しない	設置しない	設置しない
		注意標識	各入口設置 危険な箇所すべてに設置	主要入口設置 危険な箇所すべてに設置	主要入口設置 危険な箇所すべてに設置	危険な箇所に設置	特に危険な箇所に設置	設置しない
	トイレ	男女別水洗様式、常設建造物、ユニバーサルデザイン	必要に応じて男女別水洗洋式か汲み取り式	汲み取り、貯留式、必要に応じてバイオトイレ	携帯トイレブース設置。必要に応じて貯留式、バイオトイレ	必要に応じて携帯トイレブースの設置	設置しない	
	休憩施設	展望所 あずまや	なし	なし	なし	なし	なし	
	園地	必要に応じて設置	必要に応じて設置	必要に応じて設置	なし	なし	なし	
	ベンチ	一定距離で設置	必要に応じて設置	必要に応じて設置	なし	なし	なし	
ユニバーサルデザイン	全施設	必要に応じて設置	なし	なし	なし	なし		
自然環境の水準	野生動物との出会い	まれに野鳥、小型哺乳類	野鳥、小型哺乳類 大型哺乳類との遭遇の可能性あり	野鳥、小型哺乳類 大型哺乳類との遭遇の可能性あり	大型哺乳類との遭遇の可能性大	大型哺乳類との遭遇の可能性大	大型哺乳類との遭遇の可能性大	
	自然らしさ	人工林、択伐天然林	人工林、択伐天然林	人工林、択伐天然林	択伐天然林	天然林	天然林	
	音	自動車の音、造材の音、ダム放流の音	自動車の音、造材の音、ダム放流の音	造材の音、ダム放流の音	自然音のみ	自然音のみ	自然音のみ	
社会的環境の水準	人との出会い	しばしば人に出会う	しばしば人に出会う	1時間に4～5回、人に出会う	まれに1日に4～5回程度人に出会う	まれに1日に4～5回程度人に出会う	1日歩いてほとんど人に会わない	
	アクセス	車で到達可能	基本的に徒歩で到達可能	徒歩で到達	徒歩でのみ到達可能	徒歩でのみ到達可能	徒歩でのみ到達可能	
管理水準	整備	毎年整備	毎年整備	毎年整備	数年おきで整備	必要に応じて整備	整備されていない	
	活動プログラム	まれにプログラムが行われる	まれにプログラムが行われる	まれに経験者向けプログラムが行われる	まれに経験者向けプログラムが行われる	まれに経験者向けプログラムが行われる	なし	
	情報提供	解説版	解説版	解説版	なし	なし	なし	
	安全対策	不定期の巡視	不定期の巡視	不定期の巡視	自己責任	自己責任	自己責任	
理想像に基づく幌尻岳各登山道区分案	チロルルート	-	北電ゲート～取水ダム	-	取水ダム～作業道終点	-	作業道終点～幌尻岳山頂～七つ沼カール	
	ヌカピラルルート	-	-	-	仮ゲート（駐車場）～取水ダム	取水ダム～四の沢	四の沢～幌尻山荘	
	新冠ルート	-	-	新冠ダム～ニイカップボロシリ山荘	-	幌尻山荘～幌尻岳山頂～七つ沼カール～中トツ山荘下り分岐	中トツ山荘下り分岐～六の沢出合	

図：幌尻岳の登山道管理水準(案)

山中での宿泊は野営が主体だが、ごみやたき火跡の放置が報告されている場所もある。登山利用の実態を把握し、野営指定地を設定するか否かなどの検討も欠かせない。避難小屋や登山口以外にはトイレがない。幌尻山荘ではトイレの維持管理に多大な労力を要しており、携帯トイレの利用を呼びかけているが、ブースの設置、販売方法、回収も含めて全山の方針も議論の対象となる。

また、公園区域外の歩道や避難小屋・トイレの維持管理を除外して、国立公園内だけの方針や体制づくりを検討するわけにはいかないだろう。日高では、遭難や事故が途絶えることはない。北海道警察の統計では、滑落や転倒、体調不良などにより2023年には7件の死亡、7件の負傷などが発生している。国立公園指定後に経験の浅い登山者の事故が増えないか、地域の関係者も危惧するところだ。日高の特長を踏まえたリスク管理、情報提供の検討も急務である。

山域の登山道や施設は、地元の山岳会、自然保護団体、市町村、森林管理署の尽力によって維持されてきた。国立公園化後に設立される協議会では、関係団体や関係者に協力を呼びかけ、幅広く意見を集めて日高の原生的な登山体験と自然環境を維持できるように検討が行われることを期待する。これまでの国立公園にはなかった新たな挑戦となるだろう。

今後の取組

2024年6月25日の国立公園誕生に続き、8月27日には保全と利用の目標を示したビジョンを策定し、連携した取組をすすめる日高山脈襟裳十勝国立公園協議会が、関係機関、市町村、関係団体が参画して設立された。その幹事会ではビジョンの検討が行われ、登山の課題を協議する部会の準備会で、議論が進められている。関係者に共通するのは、自然環境を保全して、適正な利用が行われること、日高山脈の特性にふさわしい登山利用を促すことであり、今後も関係者の意見を丁寧に聞きながら検討がすすめられるように尽力したいと考えている。

(参考資料)

北海道警察(2024)安全登山情報

<https://www.police.pref.hokkaido.lg.jp/info/chiiki/sangaku/sangaku-top.html>

2024年6月12日参照

滝本幸夫(1982)北の山の栄光と悲劇、岳書房

梅沢俊・菅原靖彦・長谷川哲(2020)北海道夏山ガイド4:日高山脈の山々、北海道新聞社

山のトイレを考える会(2024)日高山脈・山小屋とトイレの調査 <http://yamatoilet.jp/>

2024年6月12日参照